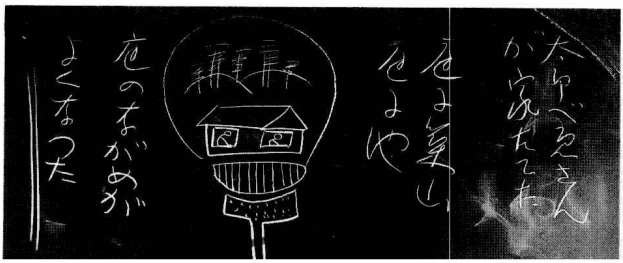
野口雨情 詩と民謡の旅

東道人

口雨情 詩と民謡の旅

道人



踏青社

東　道人（ひがし　みちひと）

一九四八年一月、三重県南勢町押淵に生まれる。国学院大学文学部卒業。神職。著書、『定本　野口雨情』第五巻・地方民謡篇（編著・未来社）『野口雨情　回想と研究』（共著・あい書林）『風外本高和尚―研究と語録―』（共著・名著普及会）。

野口雨情　詩と民謡の旅

一九九五年一〇月二〇日　初版印刷
一九九五年一〇月三一日　初版発行

著　者　東　道人

発行者　斎藤　熙

発行所　**踏青社**
東京都文京区本郷四丁目一二―一〇―二〇五
電話（〇三）三八一二―一七二五

印刷所　太陽印刷工業株式会社

製本所　大観社製本株式会社

定　価　四五〇〇円（本体四三六九円）

©1995, Printed in Japan

ISBN 4-924440-31-0

*

発　売　審美社
東京都文京区本郷四丁目九―七

はじめに

野口存彌

本書は篤学の研究者東道人氏が厖大な時間とエネルギーを注いで完成された労著である。別のところでも述べたことがあるように、いわゆる雨情研究は私が昭和四十八年に「空からの視線」を、翌四十九年に「花々と荒野と」を発表した時期に始動した。こうした研究は昭和女子大学近代文化研究所の『近代文学研究叢書』第五十四巻（昭和五十八年刊）に雨情の項が収録され、昭和六十年から六十二年にかけては未来社より『定本 野口雨情』全八巻が出版されることによって一応の達成をみた。

しかし、それでも不可避的に鍬の入らない領域が残ってしまう。新民謡運動ともよばれる民謡の普及活動がそれにあたるが、東道人氏が本書でテーマとしたのはまさに父のその活動についてなのである。

数多くの忘れがたい名作童謡をうみ出し、子供から大人に至るまで十全に受けとめられて日本人全体に精神史的な影響を与えた童謡運動が終熄状態を示すと、父は民謡普及のための活動に全努力を傾注するようになる。

『民謡詩人』昭和三年三月号には「新民謡の提唱について」が発表される（『定本 野口雨情』第六巻

収載）。

この民謡普及のための活動は昭和十八年二月に父が病気に倒れ、その年五月から六月にかけて母が付き添って山陰を、十月には四国を回ったのが最後となるまでたゆむことなくつづけられた。

民謡普及のための旅は旧植民地や外地にも及んでいる。すでに樺太には明治三十九年に渡っているが、この場合は北緯五十度線の国境確定の作業を担当する劃境委員に加わったとみるのが妥当である。

朝鮮には大正十三年（四月～五月）、昭和十二年（五月～七月）、同十四年（六月～七月）の三回、満洲、モンゴル（内蒙古）には大正十五年（九月～十月）、昭和九年（七月）の二回、台湾には昭和二年（四月）、同十四年（十一月～十二月）の二回足を運んでいる。これらの旅行のディテールが明らかになるような資料は残されておらず、今となっては分析解明が困難であり、本書にもとりあげられていない（旧植民地での詩作そのものは『定本 野口雨情』第五巻に収載されている）。なお、昭和十四年の朝鮮旅行は『定本 野口雨情』第八巻の年譜にも記載洩れとなっており、ここで初めて明らかにすることである。

先に触れた「新民謡の提唱について」をよめば、父がめざした民謡が国土的な作品だったことが判明する。生涯に書いた何冊かの民謡理論書でも民謡が民衆的、民族的、国民的でなければならないことを繰り返し説いている。具体的な例を示すと、『民謡と童謡の作りやう』（大正十三年刊）には「国民性は民謡の中に、もつともよく表はれてゐるものであります。この点から見ても、民謡が直ちに国民詩であることがお分りでせう」という文言が見られる。

童謡といい、民謡といい、私的な性格の作品であれば、父は自作を提示して童謡や民謡普及の活動を活潑におこなうということはなかったに違いない。父の詩作はいずれも極力私的な性格を排除したところに成り立っている。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

「新民謡の提唱について」が発表された昭和三年は春山行夫氏を中心軸にして『詩と詩論』が発刊され、海外詩の動向と連動してモダニズム詩の運動が始発した年でもある。詩論を重視し、詩作に方法論的自覚を要求する春山行夫氏を中心軸にした詩人たちによって近代詩は否応なしに現代詩と交替させられる。

父はすでに明治四十年前後にもそれと共通する詩の変貌ぶりに直面させられていた。象徴主義・自然主義を前面に掲げて外国文学の傾向が強い影響力を伴って押し寄せてきて、その時点で7・7・7・5音の俚謡の詩型を基盤にしながら童謡と民謡を実現しようとしていた父は手痛い苦渋を味わわされる。

昭和初年の場合も、外来のモダニズムの波に自身の詩的立場が圧しつぶされる危機感をいだかざるを得なかったことが指摘できるように思われる。父の主眼としたのが近代西洋の影響を受ける以前の日本人の純粋無垢な精神を童謡と民謡によって受け継ごうとすることにあったのを考え合わせれば、いまのようなことが当然言えるのである。

父の民謡観の結晶化したのが昭和四年に中村有楽氏の普及社より刊行された『全国民謡かるた』である。このかるたの詞章は詩集『草の花』（昭和十一年刊）に「旅の風草」と題して収載されたが、道府県別に編纂されている。そういえば柳亭種彦の編纂とされる『山家鳥虫歌』も山城、大和、河内といったように国別になっていた。冒頭の山城の「めでためでたの若松さまよ、枝も栄える、葉も茂る」で『山家鳥虫歌』は始まり、終わりは対馬の項の「いざや若い衆、ござるまいかよ昼狐、なんのばかさりよ、とんとろばけよ」で結んでいる。

『山家鳥虫歌』は上田敏の最後の刊行書となった『小唄』（大正四年刊）に収録されていて、『海潮音』

等によって近代詩に象徴主義を移植し、伝統詩歌には存在しなかった絢爛とした西欧的詩美を現出したのが上田敏その人だったことを考えれば、これは文学史の皮肉というよりほかはない。ただ、『海潮音』にもたとえば「山のあなた」のように本来民謡の範疇に入る作品も収録されているので、上田敏の『小唄』もその延長線上でとらえれば理解できるように思われる。

『全国民謡かるた』を編纂する際、父は『山家鳥虫歌』を意識したことが想像される。そして、東道人氏も本書の記述に際して同じように都道府県別のスタイルをとられた。

東道人氏より伯父東鬼外氏の残された資料のことでご連絡をいただいたのは、ちょうど母が倒れ、入院して生きるための最後のたたかいをしていた時期だった。忘れもしない、昭和五十四年末のことである。その連絡を契機にして、地方ご在住という必ずしも利便ではない条件下で東道人氏のエネルギッシュな研究が開始された。東道人氏は熱情の人でもある。篤学且つ熱情の人にして、初めて未解明の分野を切りひらくというお仕事が可能になったと言える。

加えて、このたび踏青社社主の斎藤熙氏が詩歌万般についてのゆたかな理解者であられることが本書刊行に至るプロセスで大きな支えとなったのを私は眼のあたりにさせられた。

父の死は敗戦の年だったから、それからちょうど五十年が経過したことになる。本書の刊行が没後五十年という区切りのうえでの最上の記念になると考え、東道人氏と発行者の斎藤熙氏に厚くお礼申し上げたい。

野口雨情　詩と民謡の旅／目次

はじめに／野口存彌……巻頭
I　西日本篇……五
近畿地方
三重県……七
和歌山県……三八
奈良県……五八
滋賀県……七四
京都府……八一
大阪府……八六
兵庫県……八八
中国地方
鳥取県……一〇〇
島根県……一三六
岡山県……一四七
広島県……一五六
山口県……一八六
四国地方
徳島県……二〇一
香川県……二二〇
愛媛県……二二七
高知県……二五〇
九州・沖縄地方
福岡県……二七四
佐賀県……二八四
長崎県……二八八
熊本県……二九五
大分県……三二一
宮崎県……三四一
鹿児島県……三五八
沖縄県……三七一

II　東日本篇……三七三

北海道・東北地方

北海道……三七五
青森県……三九二
岩手県……三九四
宮城県……三九八
秋田県……四〇三
山形県……四〇四
福島県……四〇九

中部地方

新潟県……四一二
富山県……四五三
石川県……四六六
福井県……四八〇
岐阜県……四八三
愛知県……四九四
静岡県……五一三
長野県……五三〇
山梨県……五三七

関東地方

群馬県……五四一
埼玉県……五五五
東京都……五六五
神奈川県……五八四
千葉県……五九一
茨城県……六〇五
栃木県……六一九

〈付録〉　野口雨情講演記録

童謡の話……六二五
童謡教育と模範学校……六三八

あとがき……六四七

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

I

西日本篇

近畿地方

三重県

野口雨情の詩と民謡をめぐる旅を、筆者の住む三重県から始めたいと思う。

三重県下に伝存する雨情の民謡作品は、〈伊賀上野小唄〉〈躍進上野小唄〉〈新伊勢音頭〉〈尾鷲小唄〉〈九鬼小唄〉〈五ケ所湾小唄〉〈桑名〉〈松原小唄〉などが数えられる。それらの作品について、当時の新聞記事等を披展しながら述べてゆくこととする。

まず、同県下での詩作時期が最も早い〈伊賀上野小唄〉から見てみよう。

伊賀の地名の起始は、猿田彦大神の女・吾娥津媛命の邦土である吾娥郡の「アガ」が音便をなして「イガ」に変化したと言い、また、崇神天皇の皇女・伊賀津比売命の所領する伊賀の郡名に発したとも考えられている。もっとも、伊賀は古く伊勢国に従属していたのであるが、やがて伊勢の四郡を割譲するに至り、ここに伊賀国が定められ、国府を阿拝郡に置いたのである。さらに『三代実録』巻七・貞観五年（八六三）五月二日の条に、「伊賀国名張郡の節婦伊賀朝臣道虫女に、永く戸内の田租を免じ、身を終るまで事勿らしめ、云々」と記されているように、現在の名張市も伊賀国の郡名であった。

『万葉集』に詠まれる歌、

わが背子は何処行くらむ奥つもの隠の山を今日か越ゆらむ　（巻一・四三）

暮に逢ひて朝面無み隠にか日長く妹が廬せりけむ　（同・六〇）

などが思い浮ぶのである。

さて、大阪朝日新聞・昭和五年七月二十七日付に「名張小唄」と題し、

民謡小唄流行の折柄――伊賀名張町でも宇陀・名張の清流や赤目滝・香落峡の景勝、情緒豊かな名張女の姿などを上品に織りまぜた「名張小唄」を新作すべく、目下富永町長、池田商工会長らの手で計画を進めてゐるが、作歌は野口雨情氏、曲は中山晋平氏に依頼することにならう。

と報じている。『三重県民謡全集』（伊勢新聞特別大附録・昭和六年十月三日刊）にもそのような題の作品は見当たらないのであるが、次いで、伊勢新聞・昭和五年九月三日付に「十月上旬に上野民謡公演」と見出しをつけた記事がある。

上野民謡を天下に広く紹介し町発展と山国の伊賀上野の巷に多く足を印せしめんとの見地から上野町では、名所旧蹟、伊賀越の大仇討を織込んだ中に、花も実もある情緒纏綿たる民謡を公開せんと、曩に来野した野口雨情氏の手により著作中であるが、来る五六日頃東都より作曲の大家中山晋平氏が雨情氏の作歌を携へ、来野の上、更に上野町の名勝地、人情、風俗其他各方面に亘り視察し、研究の上、先づ帰京し、来る九月中旬作歌と作曲の両方面から合致したものを公開することとなつた。その振付は一般民衆に気受のよい舞踊の名家島田豊氏を招き上野芸妓に習得せしめ、いよ〳〵今秋十月執行する伊賀大祭に一大公演会を開くことになつた。

記事に「曩に来野した野口雨情氏」と見えるところから、雨情は〈伊賀上野小唄〉を詩作するため

に、九月以前にも一度上野町を訪ねていることがわかる。恐らく前述した〈名張小唄〉もこのころ同様に計画され、何らかの事情で詩作されずに終ったものと推察し得る。報じられるように、中山晋平は九月五、六日頃、伊賀上野に雨情の作品を携えて訪れたと見做してよいであろう。

そして、大阪朝日新聞（三重版）同年十月十八日付には、「新作上野小唄―上野芸妓総出でけふ二回発表会」と題し、次のように報じている。

上野町の民謡「上野小唄」は野口雨情氏作歌、中山晋平氏作曲で左の如き情緒まことに豊かなものが完成したので、今十八日午後三時（民謡普及会関係者）、同七時（一般公開）の二回広栄座で発表演奏会を開き、島田豊氏の振付けで、上野芸妓総出の舞踊があり、余興に大軌あやめ池専属川上少女歌劇団の童謡舞踊、ダンスなどあるが、会場では野口氏は作者として、中山氏は作曲者としての挨拶がある。

一、伊賀の水月、鍵屋の辻はヨ　「義理のしがらみ、乗りかけお馬」　荒木武勇で名がひびく。
ハ、チヤン、チヤカ〳〵　チヤンリン、チヤカラカ　チヤラコロ〳〵、ドサイサイ
（他七節省略）

紙上には〈上野小唄〉として八節を載せるが、同作品は全部で十一節から成っている。昭和五年十月十八日、その発表会が広栄座で催されたのである。

『家の光』昭和六年三月号に、雨情は「上野小唄の旅」と題する一文を寄せ、

芭蕉の郷国伊賀に民謡小唄の生れなかつたのは、要するに伊賀の自然が民謡小唄の要素に欠けてゐると言ふべきで、これはひとり伊賀ばかりでなく、さうした土地に新しく民謡なり小唄なりを作ることは随分困難な仕事で、形式だけは民謡の形式であつても、又小唄の形式に叶つてゐても、

作品の上から言つたとき赤面せざるを得ないものが多い。況んや、小唄民謡は俗耳に入り易いために、誰にでも作れるものと考へてゐるかも知らぬが、小唄と民謡の区別さへもわきまへぬ人ならばいざ知らず、多少なりともわきまへのある人なら、易々と作り得られるものではない。

と述べている。また、「その芭蕉の出生地、伊賀の上野へ、私が民謡の旅に出かけたのは、昭和五年の秋である」と言い、これは前出の紙上に記される時期と符合するのであるが、さらに雨情は、「歌詞が出来て曲、曲が出来てから振りとなるのが順序だが、それが逆になつてしまつたので大分上野小唄作製には戸惑ひました」と述懐している。なお、昭和五十五年二月五日付の中部読売新聞に「東海の歴史」と題する記事のなかで栄楽亭（上野市相生町）を紹介し、その一節に、「栄楽亭には、昭和のロマンを代表する野口雨情・中山晋平もコンビで遊んだという」とある。年代は明記されていないが、あるいは昭和五年十月の一夕、雨情、中山晋平、島田豊などがともに栄楽亭で旅の疲れを癒したのではあるまいか。

同作品は日本ビクターレコードより、製作年は現在のところ明らかでないが、表題を〈新作民謡・伊賀上野小唄〉としてレコード化され、A面は佐藤千夜子の独唱、B面が民謡歌手の藤本二三吉の唄で吹き込まれている。県下では雨情作詞になる最初の民謡であり、また初めてレコード化された作品ともなったのである。なお、野口存彌氏の保存するレコード歌詞の末尾に次のように註記されている。

「伊賀の水月、鍵屋の辻ヨ」……荒木又右衛門の武勇伝で有名な三重県、伊賀上野に出来た小唄です。華やかな面白い踊りの振もあるので、伊賀上野小唄と荒木武勇伝で尚一層名がひゞくでせう。

「鍵屋の辻」での仇討は、日本三大仇討として有名で、寛永十一年（一六三四）十一月七日、渡辺数馬の姉婿にあたる荒木又右衛門が数馬の仇討の助勢に立ち、河合又五郎をはじめ三十六人を斬ったと

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c